
ホワイトストロベリー

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホワイトストロベリー

【Nコード】

N5163G

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

最終日に訪れた、突然の出来事。…日番谷、ツンデレ入ってます

（笑）

（前書き）

ー×日です、気をつけてください。 18禁にするまでも無いかと。

空座高校、二年。

一際目立つ、オレンジの髪と銀髪。

言わずと知れた、黒埼一護と日番谷冬獅郎である。

「なあ、冬獅郎」

「あのなあ、日番谷隊長だっつってんだろーが」

そう言いながらも、日番谷の顔には少し笑みが浮かんでいる。少し、楽しんでいるのかもしれない。

この、滅多に無い体験に。

偶然の任務での高校潜入。しかも、一週間。

長いようで短いこの七日だが、特に冬獅郎にとってはかなりの短さだった。

いつの間にか、もう最終日。そう感じるほどに、この七日は短かった。

「最終日だな」

「ああ」

素っ気無い会話が続く。

不意に、一護が日番谷の耳元に口を近づけた。

その低く、ほろ苦い声で、言葉を一つ一つ、丁寧に言っていく。

「今日、俺ん家な」

「…は？何でだよ」

肘をつき、クールな態度を取りながらも、日番谷の顔は少し驚いた

ように眉が跳ねる。

そして、理由もよく分からぬまま、一護は立ち去ってしまった。

——放課後。

カラスが鳴き始めた、夕暮れ時。

日番谷が帰るのは、今日の深夜だった。

「よっ…と…」

屋根に飛び上がり、窓を音を立てないようにスルスル…と開ける。
既に日番谷は学生服ではなく、死神の格好をしていて、隊首羽織と斬魂刀を身につけていた。

「黒崎。…黒崎？」

その名を何度も呼んでも返答がしない。

窓から、一歩足を踏み入れたその時。

「なっ…」

布団がいきなり動き出し、日番谷の身を包みこむ。

誰だ、と聞くまでも無い。一護の仕業だ。

日番谷は声を上げる間もなく、そのまま流れに流されっぱなしで、どのような反応を取ったらいいのかすら理解出来ていなかった。

「おいっ…黒崎！何の真似だよ！？」

流石の冬獅郎も声を荒げた。

人に対して声を荒げるのは滅多に無いのだが（乱菊のときは除く）、

今はそんな事を考えられる余裕すらなかった。

怒号を上げて、布団から飛び出る。

そして、少し落ち着いたところで普段の少しアルトの低い声で、言葉の口にした。

「こんな所に呼び出して、何の用だ」

一護は、何も言わない。

意味も分からず、壁にもたれかかって座った冬獅郎の肩を強引に掴み、冬獅郎の顔に迫った。

「ちょ…っ！」

迫って数秒の間、何が起こったのか分からずに、冬獅郎の周りにしばらく？マークが浮かんで消えていた。

一護は別段何も無かったかのように、その場に座り続ける。

——あの数秒のうちに感じたのは…確か…。

冬獅郎は物事を少しずつ整理していく。

——唇に、柔らかいものが触れ…た…？

その答えにたどり着き、みるみる日番谷の顔は赤く染まって行く。

「…って…てめえっ！何しやがんだ、いきなり…！」

終いには柄にも無く叫びまわした。

一護は耳を押さえながら

「うるせーな…。何だよ」

吐き捨てるようにそう言った。

冬獅郎はその言葉に更に冷静さを失って、

「何だよじゃねえだろ！てめ…今俺に…！」

乱暴に立ち上がって、一護に迫った。

「接吻か？」

言おうとした事を簡単に言われ、そしてまた、事態を再確認し、両方の恥ずかしさでまた顔が赤くなって行く。

「いいじゃねえか、キスくらい。意外と初心^{うぶ}なんだな」

「くらいって…」

言い返す気力も無くし、その場に力なくぺたんと座り込む。

「お別れの挨拶として、受け取っとけ」

「…」

顔をまだ若干赤くしながら、一護をその翡翠の目でキッと睨んだ。しかし、その視線は鋭い中にもどこことなく優しさが混じっている。一護はそれを見て少し笑い、とんでもない事を言い出す。

「もう一回、してやろうか？」

「はあっ!？」

日番谷の怒号が飛んだのは、言うまでも無い。

——そして、深夜。

日番谷は隊首羽織と斬魂刀を身にまとい、乱れた死霸装を正してい

た。

窓を開けて、肩越しに一護を見る。

満月が日番谷の丁度真後ろにあつて、何とも綺麗な画だった。

「てめえなんか大ッ嫌いだ！」

乱暴にそう言い放つて、外に飛び出る。

星の絨毯がひかれた空に、少年が、一人。

一護は窓に肘をかけて、日番谷を見返す。

「けどな」

日番谷は渋々、といったように口を開いた。

「また…遊びに来てやる」

頬が赤いのは、月明かりのせいかもしれない。

だが、一護はその言葉に笑みをこぼし、

「おう、またな！」

と元気よく返事を返した。

（後書き）

…いや、一×日を書いてくださいとの要望がアンケート（ブログに貼っているもの）にありまして書いた次第です。

…どうでした？初の試みなので、よく出来ているかどうか分からないので辛口でも何でも、ご意見をいただけると今後の参考になります。

…どうか、コメントを下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5163g/>

ホワイトストロベリー

2010年10月10日14時33分発行